

令和6年春の外国人叙勲台湾人受章者（3名）に対する叙勲伝達式の実施について

昨年4月29日、日本政府は令和6年春の外国人叙勲受章者を発表しました。台湾からは3名が受章され、沈斯淳氏が旭日重光章、馬玫鈴氏が瑞宝双光章、林淑蘭氏が瑞宝単光章を受章されました。台湾にて、片山和之・台北事務所代表より、昨年8月5日に林淑蘭氏及び馬玫鈴氏、昨年11月13日に沈斯淳氏に対してそれぞれ勲記および勲章の伝達を行いました。

日台関係の発展のために長年にわたりご尽力されました受章者の皆様のご貢献に衷心より敬意と謝意を表します。

沈斯淳氏

勲 等：旭日重光章

主要経歴：元台北駐日経済文化代表事務所代表

功績概要：日本・台湾間の友好親善及び相互理解の促進に寄与

受章者のことば

本日、この場で旭日重光章の伝達を受け、大変光栄に思う。日本台湾交流協会台北事務所の方々の丁寧な御準備と、式典に出席してくれた友人達に感謝申し上げる。本日の私の気持ちは、唐宋八大家族の一つであった曾鞏氏が「寄歐陽舍人書」の中で述べた言葉を借り、「感與慚並（感動と慚愧）」と表現すれば概ね当てはまる。

先ほど片山代表は、私が外交部や日本で勤務していた頃の話がされた。私の外交官生活35年の中で、引退前の最後のポストだったからということもあるのかもしれないが、日本の印象が一番深い。「感動」の部分について、日本での4年間、東京及び各地方において、「日台間には強い絆がある」という言葉をよく耳にした。日台間の人的往来は活発であり、お互いに対する好感度も非常に高い。したがって、日本での仕事は大変楽しいものであった。

一方、目の前に対応、解決せねばならない問題があるような場面でも、よく耳にした言葉がある。それは、「雨降って地固まる」であった。この言葉は、たとえ日台間に困難な問題が横たわっていると

ても、日台双方には誠意があり、率直な話し合いを通じて解決することができることを示すものである。「慚愧」の部分については、私は東京に4年間という短くはない期間滞在していたが、振り返ってみると、もっと多くの事ができたのではないか、もっと良くできたのではないか、という思いがする。とはいえ、本日、日本台湾交流協会台北事務所の若手の方々を見てみると、日台関係の将来は必ずより良くなり、私の世代がやり残した事は、若い人達の志の下で引き続き発展していくものと確信した。

自分は週末に散歩することを習慣にしている。台湾大学のキャンパス内を散歩するのであるが、日本語検定試験や日本留学試験が実施されているのをよく見かける。多くの若者が会場で復習している様子を見て、日台関係の未来に希望を感じている。

人は一生のうちに多くの経験をする。そのうちのいくつかの経験は、どこかの歌詞にあったように、思い出す必要なく、永遠に忘れることのないものである。私にとっては、日本での経験がまさにこれに当たる。日本は読み終えることのない本のものであり、私は引退してからもこの本を読み続けている。実際に、日本の文化や歴史の本を読んでいる。

私の妻は、日本歌謡の練習を続けている。息子と娘は、暇さえあれば日本に遊びに行っている。こうした双方民間の高い好感度という基礎の上、日台関係が引き続き発展していくことを確信している。

現役時代、人から嫌われることも厭わないという勇気が必要であったが、引退した今となっては、皆で楽しく過ごすことの方が大事だと思う。本日は楽しい食卓の席であり、皆様、私の長話など聞

きたくないであろう。とはいえ、最後に言わねばならないのは、片山代表、御夫人、その他日本台湾交流協会台北事務所の方々による本日のおもてなしへの感謝の気持ちである。同時に本日出席してくれた私の友人達にも感謝したい。これまで皆様の支援と協力があったからこそ、今の私がある。日本での4年間、もし私に何らかの功績があるとすれば、それはすべて皆様の功績である。本日のこの光栄も、皆様のものである。最後に、妻のこれまでの支えにも感謝したい。私が全身全霊で仕事ができるよう支えてくれた。私の仕事上の業績はほとんど妻の業績と言ってよい。

私は、現在の読書生活、散歩生活に満足している。日本という読み終えることのない本も、引き続き読んでいく。まもなく年の瀬であるので、この場を借りて、皆様の御多幸と御健康をお祈りして、私の挨拶としたい。



馬攻鈴氏

勲 等：瑞宝双光章

主要経歴：(公財) 日本台湾交流協会台北事務所
元現地職員

功績概要：(公財) 日本台湾交流協会在外事務所
活動に寄与

受章者のことば

皆さん、こんにちは。

この度は叙勲をいただき、誠にありがとうございます。

この受章伝達式の場面には私は以前、スタッフ

として何回も手伝っていたことがありましたが、本日は自分がこの舞台の真ん中に立つのは本当に感慨深いです。

私の交流協会の勤務は、大学卒業の翌年の1981年5月に交流協会に入って、2022年9月に定年退職になるまで41年4か月にも渡りました。41年間も同じ職場で仕事を続けていたことは、凄かったとか信じられないとかよく言われています。私にとって、41年間は一日一日の積み重ねであり、大変長く感じましたが、過ぎてしまった現在に振り返ると、本当にあっという間の気がします。私が41年間も続けてきました理由は、この仕事に「誇りを持っていること」です。

私は、1981年に査証室職員として採用されました。交流協会に入った時、丁度台湾は戒厳令が解禁され、海外旅行が解放されたばかりの時期だったのです。毎朝、事務所に到着して目に付いたのはビザ申請者の行列でした。当時、毎日の申請者は3000人を超えていました。ビザ申請手数料の収入は1日約500万元に達していました。日本の国庫に大変貢献したと思います。しかも、私の勤務の最初の10年間程、パソコンはまだ導入されておらず、窓口の受付から、査証内容の手書きの記入、査証の貼り付け、交付まですべて手作業でした。毎日、主任達及び現地職員30人全員でビザ申請の処理に尽くしていました。私はビザの通常業務の他、主任3人のアシスタントの仕事としても働かせていただけていました。

2005年4月より、日本政府が台湾人に対し、90日以内短期滞在の査証免除措置を実施することに伴い、私は同年6月に経済室に異動し、農林水産省出向主任のもとで仕事をさせていただくことになりました。本日、同席の林さんは、当時この仕事の先輩でした。全く違う領域に入って、私は改めて一から勉強しなければならず、日々、農林水産物や食品や医薬品などなどの輸入、輸出についての検疫、検査に関する業務に取り組んでいました。2011年3月11日に東日本大震災が発生した後、私はほぼ毎日、主任に同行して台湾の衛生福利部や農業委員会へ交渉を行っていました。このことは最も記憶に残っています。そして2011年11月に領事室に異動しました。

領事室では窓口での日本人対応のほか、邦人援護のため、担当主任に同伴して警察局や裁判所や刑務所、病院のICU、精神疾患病院、遺体安置所などへ行き、本人やご家族に支援していました。そこでは色々な人生を見てきました。こういった交流協会の支援を求めた人たちは、恵まれていない人ばかりです。私は力になりたい、助けたいと思いつつ頑張っていました。

この41年間、達成感もあれば、時々挫折感も感じました。上司や同僚の皆様にも恵まれ、さまざまな支援を頂き、私は何とか色々な困難を乗り越えて来ました。もし、私は何らかの成果があったとしたら、私一人の力ではなく、私を指導して育てて下さった上司の皆様及び日々支えて下さった同僚の皆様のお陰と実感しております。

本日はここで表彰いただき、大変光栄に感じながら、この光栄を上司の皆様、同僚の皆様及びいつも黙ってサポートしてくれている家族と共有させていただきたいと思っております。

これからも、日台交流の力になればと思っておりますので、引き続き頑張りたいと思っております。どうもありがとうございます。



林淑蘭氏

勲 等：瑞宝単光章

主要経歴：(財) 交流協会台北事務所元現地職員

功績概要：(財) 交流協会在外事務所活動に寄与

受章者のことば

今回、日本政府から「瑞宝単光章」を授かり心から感謝申し上げます。叙勲を受章するなんて、

夢にも思いませんでした。

私は、交流協会で28年9ヵ月仕事をしましたが、その期間で経験した業務は三つに分かれると考えています。一つ目は、日本と台湾の技術協力に関するものでした。当時はまだ台湾は、日本からの技術供与先の一つでした。二つ目は、経済セクションにおいて、通産省、大蔵省、農林省様々な分野の仕事に携わりました。三つめは、日本人職員と現地職員が一組となって業務を行う体制となり、私は農林水産分野を担当することになりました。

農林水産分野の業務では、本日出席されている胡忠一氏（現・農業部政務次長）とは非常によい関係で仕事をすることができました。新しい案件があれば、とりあえず胡氏に相談していたことが思い出されます。また、行政院農業委員会（現・農業部）には日本留学経験者の会というものがあり、そのメンバーとも親しく過ごすことができました。

振り返ると、私はとても上司に恵まれていました。お陰様で忙しい時も楽しく仕事することができました。また、交流協会での仕事は、時代の変化を感じられるものであったとともに、私の人生を豊かなものにしてくれました。

そして、今日、こんなに大きなご褒美をいただくことができ、有り難く幸せに感じます。片山代表、本日出席いただいた皆様、交流協会の皆様に深く感謝したいと思います。

